

年頭にあたって  
それでも心を高く

川戸れい子 (東京 Y W C A 代表理事)

2020 年は大変な年であった。新型コロナウイルス感染拡大により、多くの命が失われ、経済活動と感染対策のジレンマの中で全世界がおののいていた。

だがコロナ禍の下でも戦火は絶えない。シリアで、パレスチナで。

私はといえばオンライン授業と研究室の片づけに追われていた。そうした中、いくつかのことが心を揺さぶった。

**【戦争に比べれば】**

同僚の 90 歳を超えたお母様が「コロナなんて戦争に比べたら何でもありません。戦争は人が人を殺すのですから」とおっしゃったとのこと。そうだ、コロナに怯えてばかりではいけない。ウイルスだけでなく、戦火にも脅かされている人々がいる。平和を求める声が小さくなってはならない。

**【「戦争の世紀」が終わっても】**

大学の研究室にあった 1980 年代末からの新聞スクラップを処分する作業中、様々な記事が目に入る。旧ユーゴスラヴィア紛争、コソヴォ紛争。多数の難民を出した。昨春入学の大学生は既に 21 世紀生まれ。ユーゴスラヴィアという国があったことすら知らないかもしれない。第二次世界大戦のことは教えられもしようが、日本ではニュースになり難いバルカンのことは。

その日本、沖縄では米兵による少女暴行事件が起こる (1995 年)。米軍機部品の市街地への落下などは日常茶飯事。それでも動かぬ日本政府。変わらない日米地位協定。こんな状況が平和と言えようか。

そしてパレスチナ、解決のきざしは見えない。

なぜ世界は良くなるのか、「戦争の世紀」は今も続いているのではないのか。押し<sup>ひし</sup>拉<sup>ひ</sup>がれそうな思いでいる中、ある記事が目にとまった。「マンデラ氏釈放！」より良い世界を求める祈りと努力は無駄ではなかった。成し得たことがあるのだ。

**【希望を持ち、心を高く揚げて】**

有色人種を同等の人間と見做さず、白人との間を隔てるアパルトヘイト体制を終わらせるために、ドイツのキリスト者たちは当時の南アフリカ政府を利さぬよう、独自の銀行を設立した。どの程度実効性があったかは分からないが、熱い祈りのあったことは確かだ。ドイツだけではない。世界の祈りと努力が実ったのだ。

だから私たちは不安の中で縮こまっていてはならない。希望を持ち、できることをしよう。平和の実現、人命と人権の尊重のために、持続可能な環境を未来に残すために、私たちのすべきことは何か。

まず、発効の運びとなった核兵器禁止条約著名に向けての運動である。唯一の被爆国でありながら、この条約から目を背けているのは、恥ずべきことと言う他はない。

平和憲法改悪を阻止するためには、外堀を埋めるような動きを見逃さずに監視し、声を上げること。日本学術会議会員の任命拒否、学問と思想の自由を否定するものであるのは明らかなのに、まともに説明しようとさえしない政権の姿勢は許し難い。

学術会議問題の陰に隠れてしまった、東京大学等の不透明な学長選出。さらに中曾根元首相の葬儀にあたり、文部科学省が国立大学や都道府県教育委員会に弔意表明要望の通知を出したこと。幸い受けた側がそろって唯々諾々と従う事態にはならなかったが、第二次大戦時に軍人であった元首相への弔意要望とは、教育への危険な介入以外の何ものでもない。

そして今一度、生活を見直すこと。

コロナ禍の中でもできることはある。真の平和を祈り、俯かず、心を高く揚げよう。